



TITLE:

京大広報 No. 335

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 335. 京大広報 1987, 335: 319-330

ISSUE DATE:

1987-07-01

URL:

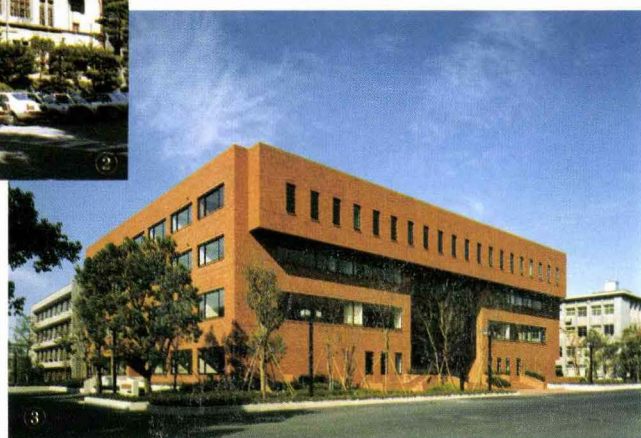
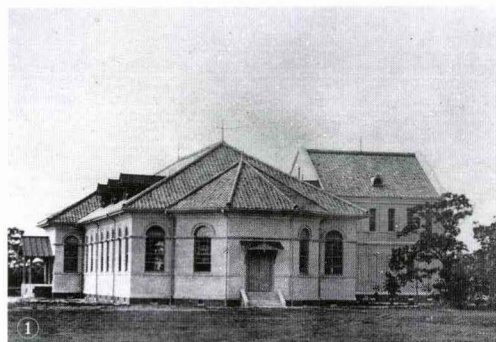
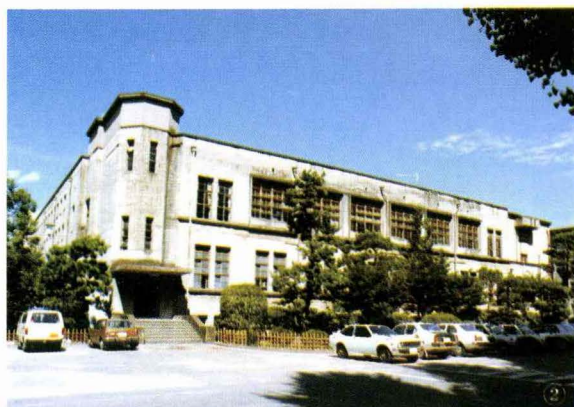
<http://hdl.handle.net/2433/209345>

RIGHT:

# 京大広報

No. 335

京都大学広報委員会



附属図書館の移り変わり

—写真説明は本文322ページ—

## 目次

創立90周年記念式総長式辞		体育館附属プールの夏季利用	327		
総長 西島 安則	320	白馬山の家	の夏季開設	327	
永年勤続者表彰代表答辞	児玉 安人	323	白浜海の家	の開設	327
創立記念式典の挙行		324	<資料>		
付表 1年間の概要		324	創立90年略年表		328
中国政府派遣大学院留学生の			<随想>		
ための予備教育への協力		325	ハイデルベルク大学を訪ねて		
<紹介>			名誉教授 早石 修		330
工学部石油化学教室		325			

## 創 立 90 周 年 記 念 式 総 長 式 辞

昭和62年6月18日

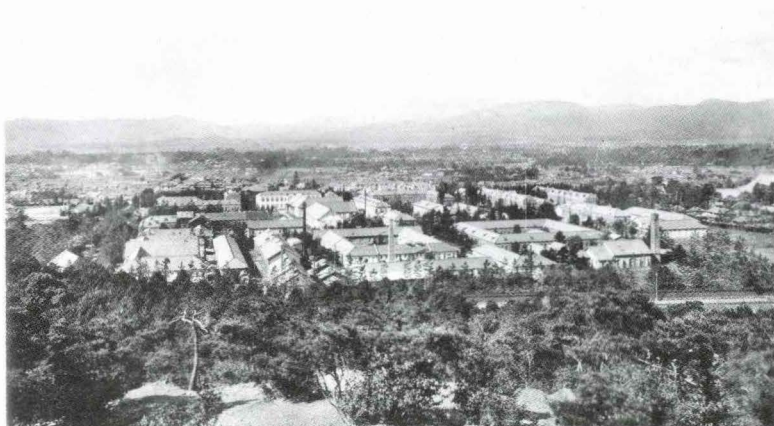
総 長 西 島 安 則

本日ここに来賓の先生方のご臨席を賜りまして、京都大学創立90周年の記念の式典を挙行するに至りましたことは、本学の教職員、学生一同深く慶びとするところであります。

この記念すべき日に当たりまして、諸先輩の偉業を偲び、本学の輝かしい伝統に思いをいたしますとともに、将来に向けての前進の基盤を固めるべく、現在の我々の覚悟を新たにいたしたいと存じます。

本学は明治30年（1897年）6月18日、即ち90年前の今月今日に公布されました勅令第209号によって真理を追究する総合大学として設置されました。最初に講義と研究を開始したのは、理工科大学で、続いて明治32年（1899年）に法科大学と医科大学が開校されました。明治39年（1906年）文科大学が設置され、かくして、当初に目標とした総合大学としての本学が完成したのでございます。思えば日清戦争（1894年8月～1895年3月）の後に、戦後の困難な時期に本学は創設されました。そうして、日露戦争（1904年2月～1905年9月）の後まで、国事多難のなかで10年間をかけて、わが国の真の学問の中心がこの京都の地に建てられたのであります。この学問の府の構想が計画されましたのは、明治18年（1885年）の頃からと聞いております。完成をみるまでに実に20年を要しております。この歳月でも分かりますように、本学の創立にいたしますまでには、数々の先人がご尽力くださいました。本日、創立90周年を迎え、我々はまず、わが国に真の学問の府を創るためご尽力いただいた方々の遠見に深甚な敬意を表し、また心より感謝の意を捧げたいと思うのであります。

先般、本学の附属図書館におきまして、洋学（主として蘭学）が日本に伝えられました頃からの資料の展示会が開かれました。それは、本学が所蔵しております17世紀中頃からの数々の貴重な資料を中心に、近代日本学術の源流を展示したものであります。あの鎖国のなかで、異質の社会、



大正6年頃の本部構内全景（吉田山より望む）



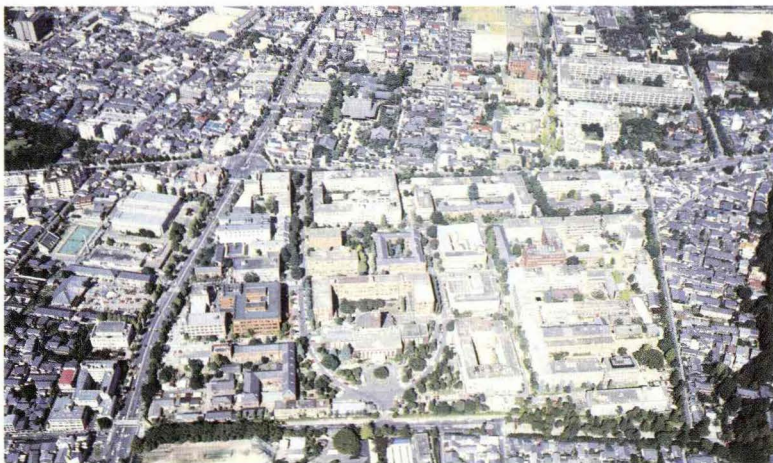
文化との接触の道は、まことに狭く、また困難なものであったとはいえ、旺盛な知的、文化的な探究と世界認識の転換が日本固有の文化の伝統と重なりながら、きたるべき近代化へと力強い学問の流れとなっていたことが示されていました。嘉永6年(1853年)にペリー(Matthew Calbraith Perry)提督が率いる黒船が来航いたしまして、政治は大きく変わり、やがて幕藩体制は崩壊し、わが国は全力を挙げて国家社会の近代化、欧米諸国の水準に到達することに向け、情熱を傾けたのであります。しかしそのような政治情勢のなかで建学された本学にとって幸いであり、また重要であったのは、この19世紀が終り20世紀が始まろうとするとき、新しい学問体系が形成され、そしてまずヨーロッパにおいて、大学の性格と社会におけるその位置付けが大きく転換しつつあったことであります。

私はこの間からいくつかの機会に、イタリアのボローニャ(Bologna)大学、ローマ(Roma)大学、フランスのパリ(Paris)大学、イギリスのオクスフォード(Oxford)大学、ポーランドのクラクフ(Kraków)大学、またドイツのハイデルベルク(Heidelberg)大学などの古い歴史をもったヨーロッパの諸大学の学長や先生方と語り合うことができました。これらの大学は中世からすでに大学の芽を育てておりました。

この何百年の間、それぞれの時代、地域社会の背景の中で大学の自律性を確立し、学問の尊厳を高めるための苦心が続けられてきました。大学は、時代とともにそれぞれの社会で固有の性格を保ち役割を果たしつつ幾多の危機を乗り越えてきたのです。しかし、新しい学問の府として教育と研究が一体となって、学問の自由と大学の自治を確立し、そしてそこで常に創造的な知的活動が行われ、社会のなかでの大学の位置付けをはっきりと打ち出したのは、19世紀に入ってからだと思います。1810年のベルリンのフンボルト(Humboldt)大学の創設は、そのような動きの一つの出発点となったのであります。この19世紀に入ってから、特にドイツから始まった大学改革の動きは、やがては新しい学問の展開の大きな力となって、19世紀から20世紀に至ったのであります。

本学が、このような時代に自由にして創造的な研究とそれを通しての真の高等教育を進める場として、建学の基礎が築かれたことは、我々自身がいつまでも胸のなかに強く刻んでおくべきことであると思います。

第二次大戦後の教育改革は、アメリカの教育使節団の提起した「教育改革についての報告書」をきっかけとして強力に進められました。新制大学が発足し、そして大学院が生まれ変わりました。



現在の吉田キャンパス

この戦後の大きな改革は京都大学のかねてからの伝統のうえに、新しい力と若さとを与えました。それは、随分苦悩に満ちたものではありませんでしたが、新しい高等教育の拡大の時代における教育と研究の関係に確かな新しい力を加えたのであります。

創設から90年、最初にヨーロッパの立派な大学に始まった学問の府としての新しい基本的性格を自らの基礎にすえ、そしてまたアメリカの新しい世界の教育の概念を取り入れ、時代とともに京都大学は今日まで大きく育ってまいりました。その道は決して今日まで平坦なものではありませんでしたが、それを貫いて変わらないものは、この京都大学で教職員、学生が時代を超えていつも共に京都大学に対して分かちあう愛情であります。

学問の自由そして大学の自治ということは、大学での知的活動にとって基本的に大事なことであることは申すまでもありません。しかし、それを支える力は、ここで行われている学問の水準の高さ以外にはないのです。学問の水準が高く維持されていてこそ、この学問の自由、大学の自治は堅持できるものであります。

古い歴史のある大学も、長い数々の苦難のなかで、今日までその名を保ち、しかも、世界のなかで学問の府として存在しているのは、その持っている学問水準、人類社会の知的遺産に付け加えていく真の貢献があったからこそであります。

京都大学は、先輩が残してくださったこの立派な伝統を堅持しつつ、創立100年に向けて、学問水準をますます高め、新しい学問の創造へと心をつなげていかねばならない使命を担っております。私は、本日から向こう20年間、創立100周年の記念日を真中において、この20年間で将来の京都大学の何百年の歴史のなかの一つの大きなときにできるように、努力すべきであると考えております。

学問の伝統は、基本的には、一人一人の力に支えられております。水準が高ければ高いほど、学問は個性的であります。しかし、そのような研究ができ、また、それから学ぶ学生がのびのびと新しい学問の在り方、そして学問をすることの喜びを身に付けるためには、やはり全体としての大学を支えていく人と心が大事であります。

本日は、永年京都大学に勤務していただいております教職員の皆さんにご出席いただいておりますが、20年勤続者144名、30年勤続者38名の表彰を本席上でさせていただきます。90周年を迎えた今日は、おめでたいお祝いの日に当たり、本学における知的活動を陰になり日向になり支えていただいている方々に心より感謝の気持ちを表したいと思っております。

京都大学が輝かしい国際的な学問の府として今日に至りました道筋で、本学の伝統ある学問水準を高めていただきました方々の代表として名誉教授の先生方が、今日はたくさんおみえくださっております。この式典の場で70年前に本学をご卒業になった名誉教授から、現役の教職員の皆さんまで一堂に会してお祝いの慶びを共にさせていただくことは、真に意義深く、心から皆さまにお礼を申し上げたいと思っております。

## 表紙写真

### 附属図書館の移り変わり

初代の附属図書館は、本学創立後間もない明治32年7月に竣工した。昭和11年1月に火災のため閲覧室等を焼失したが、一部は現在も教育学部の研究室として使用されている(写真①)。

二代目の附属図書館は、昭和15年1月の起工後、戦争のため工事を中断、昭和23年2月に竣

工式を行い、同年3月に開館した。昭和56年8月まで開館していたが、新館建設のため取り壊された(写真②)。

現在の附属図書館は、昭和56年12月に着工し、昭和58年10月に竣工、昭和59年4月に開館した(写真③)。

## 永年勤続者表彰代表答辞

本日、京都大学創立90周年という、誠に目出たく、且つ、意義深い記念式典が挙行されるにあたり、名誉教授の諸先生、並びに各部局長の先生方がご臨席の、この栄ある式場に於きまして、私達182名が永年勤続者として表彰を受けますことは、京都大学に職を奉ずる者といたしまして、これに過ぐる慶びはございません。

あまつき

剩へ、西島安則総長から、只今身に余るご懇篤なお言葉と記念の品を賜り、心から厚くお礼申し上げます。

西島総長が、この春の入学式で述べられた御祝辞の一部に、「本学が諸君を選び、諸君が本学を選び、ここに相まみえるこの意義深い出会いの場である今日の入学式…」、というお言葉がございました。私達は、出会いの在り方こそ、入学式のそれと異なりはいたしましたが、一人一人が、それぞれの立場で、今から20年、或は30年前に、職員になるための京都大学との出会いの日がございました。

爾来、わが国を代表する最高学府に身を置き、先生方の教育・研究の推進にお役に立てる誇りと慶びは、歳月の経過と共に深まり、終生の職場として、京都大学と出会えたことの仕合わせを折にふれて噛みしめると共に、それを選んだ自負心をひそかに抱きながら、今日のこの日を迎えるに至った、と申し上げて、決して過言ではございません。そして、本日のこの栄誉に浴することができましたのは、教官の皆様方のご支援とご理解、先輩諸兄のご指導とご鞭撻、さらに同僚並びに後輩各位のご協力があったればこそと、私達一同この機会をお借りいたしまして、改めて厚くお礼申し上げる次第でございます。

先般、将来計画検討委員会から、「21世紀を展望した本学の在り方及びそれに即した施設の整備」についての第三次答申が出されましたが、関西文化学術研究都市に焦点を当てたその将来構想が、現実のものとなりますまでには、未だ相当の時日を要することではございましょう。しかしながら、この雄大な構想が打ち出されたことは、本学が遠い将来を見詰め、さらに大きく飛躍するために、既に羽搏き始めたということが言えようかと存じます。私達は、90年の歴史を背負ったこの輝かしい京都大学の未来への羽搏きが、より力強いものとなり得ますように、微力ではございますが、これからも精一杯お力添えをさせて頂く所存でございます。総長初め諸先生方、並びに先輩各位には、今後とも一層のご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

終りにのぞみまして、京都大学の弥栄を心から祈念し、甚だ簡単ではございますが、被表彰者一同に代わりまして本日のお礼のご挨拶とさせていただきます。

昭和62年6月18日

永年勤続被表彰者代表

兒 玉 安 人



## ＜大学の動き＞

## 創立記念式典の挙行

6月18日（木）、本学創立90周年記念式典が、



名誉教授懇談会

名誉教授、部局長ら関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式典は午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続

者の表彰、永年勤続者代表の答辞があり、本学の発展を祈念して、松田長三郎名誉教授の発声により万歳三唱が行われ、午前11時終了した。

本年の勤続30年表彰者は38名、勤続20年表彰者は144名、計182名である（被表彰者氏名は6月19日の学報第4218号に掲載されている）。

引き続き11時30分から京大会館2階会議室で名誉教授懇談会が、また正午から同会館1階講演室及びラウンジで永年勤続被表彰者祝賀会がそれぞれ開催された。

## 付 表

## 1年間の概要（昭和61年6月18日～昭和62年6月17日）

- |                               |                                |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1. 独立専攻の設置…………… 2             | 7. 奨学寄附金受入額（昭和61年度）            |
| 「経済学研究科」現代経済学専攻               | 受入件数 1,655件……前年比 108.52%       |
| 「工学研究科」応用システム科学専攻             | 受入金額 14億9,759万8千円……前年比 110.08% |
| 2. 講座の新設…………… 2               | 8. 職員数（62.6.1現在）               |
| 「経済学部」比較社会・経済政策（大講座）          | 5,582名 { 教 官 2,657名            |
| 「医学部」形成外科学                    | { その他職員 2,925名                 |
| 3. 研究部門の新設…………… 5             | 9. 学生数（62.5.1現在）               |
| 「化学研究所」材料物性基礎（大部門）            | 15,662名 { 学部学生 11,843名         |
| 「食糧科学研究所」地域伝統食品（外国人客員部門）      | { 大学院（修士） 2,204名               |
| 「ウイルス研究所」がんウイルス（大部門）          | { 〃（博士） 1,615名 } 3,819名        |
| 「基礎物理学研究所」非線形物理学              | （聴講生 242名、研修員 742名、研究生 209名）   |
| 「放射線生物研究センター」放射線類似作用          | 10. 留学生数（62.5.1現在）             |
| （客員部門）                        | 51か国 582名                      |
| 4. 竣工した建物等…………… 6件            | 11. 卒業生数（旧制を含む）                |
| 文学部博物館（R4-1 延5,090.66㎡）       | 121,125名（61.5.2～62.5.1 2,477名） |
| 宇治地区外国人研究者宿泊施設（R4 延1,462.80㎡） | 12. 修士課程修了者数（62.6.1現在）         |
| 防災研究所伊佐地殻変動観測施設坑道（一式）         | 22,886名（61.6.2～62.6.1 961名）    |
| 教養部校舎（R4 延1,635.54㎡）          | 13. 博士学位被授与者数（62.6.1現在）        |
| 工学部媒体統合実験研究棟（R4 延616.47㎡）     | 19,749名（61.6.2～62.6.1 553名）    |
| 病院地区基幹整備（サービス・サブライ棟）          | 14. 外国出張等 1,706件               |
| （R2 延385.64㎡）                 | 15. 海外からの学者等の来訪（昭和61年度）        |
| 5. 昭和61年度決算額                  | 一時訪問者 105件（59か国）…………… 828名     |
| 746億373万3千円……………前年比 104.06%   | 外国人研究者等…………… 315名              |
| （うち科学研究費補助金                   | 日本学術振興会からの依頼による                |
| 39億890万3千円……………前年比 102.54%）   | 短期来訪研究者……………71名                |
| 6. 昭和62年度当初予算額 603億3,065万4千円  | 16. 海外学術調査 23件                 |

## 中国政府派遣大学院留学生 のための予備教育への協力

中国政府は、日本に派遣する大学院留学生に対し、来日前に日本語による基礎的専門教育及び必要な言語教育等の予備教育を実施している。この予備教育について、文部省を通じて本学に協力依頼があり、下記のように教養部教官を中心に専門教育を担当する教官が、毎年、大連外国語学院派遣留学生養成訓練部に派遣されている。

本年（第6回）も教養部徳岡善助 教授を派遣団長とする8名の教官が、6月30日から9月15日まで派遣されることとなり、6月24日（水）学生会議室で、総長をはじめ関係教職員が出席して、

壮行会が行われた。

現在本学に在学する中国人留学生数は194名（うち大学院留学生 126名）に達し、各国留学生のうちで、最多数である。

昭和62年度派遣教官（8名）

徳岡 善助	教養部教授（物理学）	団 長
河合良一郎	ク	（数 学）副団長
上田 顯	工学部教授（情報処理論）	
大谷 晋一	教養部教授（化 学）	
錦織 優	教養部助教授（生物学）	
山下 清	ク	（経済学）
高澤 淳夫	ク	（社会学）
宇土 顯彦	工学部助手（情報処理論）	

（学生部）

## <紹 介>

### 工学部石油化学教室

石油化学教室は、昭和14年3月の創設になる燃料化学教室が昭和41年4月に改組拡充されて発足し、さらに昭和58年4月には分子工学専攻の創設を担って1講座の転出を行い、現在の7講座の構成に至っており、まもなく創設以来半世紀を迎えようとしている。すでに昭和2年から、工業化学教室の喜多源逸教授のもとで石油合成の研究が開始されていたが、その後十余年の基礎的検討を経て工業化パイロット試験にまで発展し、昭和14年3月には、水素と一酸化炭素からなる原料ガスを1時間当たり100 m<sup>3</sup>の規模で処理するまでに大がかりなものとなっていた。このパイロット試験成功の業績を背景として、燃料化学教室は創設され、当初2講座で発足したが、やがて5講座の構成となって、人造液体燃料合成のほか、高性能航空燃料の製造、化学工業原料としての化石燃料資源の利用などの研究を対象として発展していた。

戦後は、石油炭化水素の化学変換と合成を主眼とする石油化学の研究に展開し、炭化水素化学を基礎においた広範な理論化学と、石油化学技術の核心をなす触媒の科学と技術ならびに精密炭化水素合成などの分

野で充実が進み、昭和41年4月には改組拡充成って石油化学教室と称するに至ったのである。昭和44年11月には、創設以来置かれていた時計台西側の赤レンガの建物をあとにして、工学部9号館として新設された裏門脇の現在地に移転した。ちなみに、旧建物は、第三高等学校物理学教室に始まるもので、後に多くのノーベル賞受賞者を生んだ建物としても永く記念されることになろう。昭和56年には、当教室福井謙一教授が、化学反応理論の根幹をなすフロンティア軌道理論の業績により、日本で初めてのノーベル化学賞の受賞に輝いたことは記憶に新しい。

二度にわたった石油危機後は、当教室は再び合



福井謙一先生ノーベル化学賞メダル両面の  
レリーフ（石油化学教室1階ロビーに掲額）





福井謙一先生ノーベル化学賞受賞記念石碑  
(石油化学教室前庭)

成燃料研究において世界を先導する業績を挙げ、脈々と流れるエネルギー資源開発のメッカとしての自覚のもとにその責任を果しつつある。

講座編成順に現況のハイライトを紹介すると次のとおりである。

#### ＜基礎炭化水素化学講座＞

炭素と水素だけで構成された極めて安定な炭素陽イオンと炭素陰イオンとから、炭化水素塩を合成することに初めて成功し、理論有機化学と精密合成化学の構築に努めている。

#### ＜炭化水素物理化学講座＞

量子化学を基として、化学反応路の分子レベルでの解明、導電性ポリマーの構造と物性、有機金

属の構造と反応など、広く物質内の電子過程と構造の相関を明らかにする研究を行っている。

#### ＜触媒化学講座＞

アモルファス合金、光化学反応用触媒、酵素モデル錯体触媒など新しい触媒材料を題材として、表面活性種の特性を解明するとともに、均一系と不均一系の触媒作用の相関を究明する基礎研究に重点を置いた展開を見せている。

#### ＜石油変換工学講座＞

遷移金属錯体の特性を生かした高度に選択的な触媒反応の開発と機能性材料の合成を行うとともに、化石

炭素資源の高度利用に関する基礎と応用研究を精力的に行っている。

#### ＜石油化学加工学講座＞

生体内のアミノ酸合成の機構を解明するため、機構論的研究ならびに酵素自殺基質のモデル化反応など、生化学と石油化学の接点となることを攻究している。

#### ＜触媒物理学講座＞

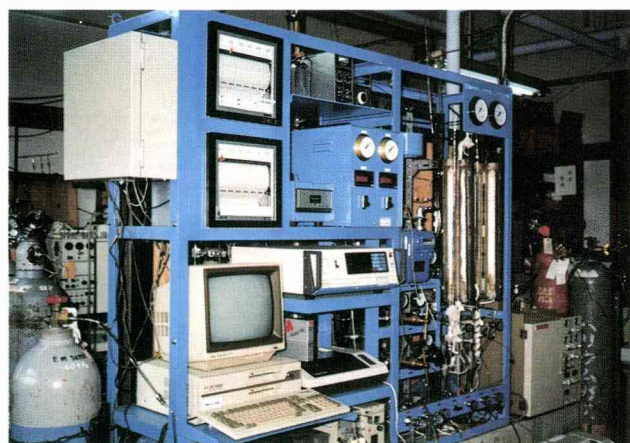
電離放射線などに感応して高分子固体内マトリックス内に誘起される化学反応を制御するための高次微細構造の設計と合成、および高性能半導体光触媒の設計など、励起化学の分野の研究に重点を置いている。

#### ＜触媒工学講座＞

分子レベルに制御された微細構造をもつ高性能固体触媒を相次いで開発し、合成ガス、メタノール、低級炭化水素などの単純分子から、高オクタンガソリンなどの液体燃料やオレフィンなどの化学品原料の定量的な合成に成功するなど、次世代レベルの触媒化学への道を拓きつつある。

以上のように、この教室では、光輝ある伝統に支えられながら、高度に制御された触媒作用を駆使するエネルギー資源、化学品原料、および高機能性材料の創生に向けて、化学反応の理論と実践の研究と教育に励んでおり、今後の継続した展開が確信される。

(工学部)



自動制御化された合成ガスからガソリンを合成する装置 (触媒工学講座実験室)

## 体 育 館 附 属 プ ー ル の 夏 季 利 用

本学の学生及び教職員は、体育館附属プールを下記により利用できます。

なお、詳細については、学生部厚生課厚生掛（西部構内体育館内、電話 学内2590）に照会してください。

### 記

期間 7月14日（火）～8月31日（月）  
ただし土曜日及び日曜日は使用できません。

時間 正午から午後2時まで

（注意）

1. 利用に際しては、必ず職員証または学生証を呈示してください。



2. 都合により使用をお断りする日があります。

## 白 馬 山 の 家 の 夏 季 開 設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている白馬山の家を、今夏も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の樽池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山及び避暑などに最適です。

なお、建物は、山小屋風の木造地上2階地下1階建てで、間取りは、1階が食堂兼談話室、2階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

### 記

1. 名 称 京都大学白馬山の家

2. 所 在 地 長野県北安曇郡小谷村大字千国<sup>あづみ おたり ちくに</sup>字柳久保乙869の2

（交通機関）

J R大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親<sup>おや</sup>の原<sup>はら</sup>」下車、徒歩約20分

3. 開設期間 7月10日（金）から 8月20日（木）まで

4. 所要経費 1人1泊 使用料80円、ほかに食費実費程度

5. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内総合体育館内、電話 学内2574）に照会してください。

## 白 浜 海 の 家 の 開 設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、白浜海の家を下記のとおり開設します。

この海の家は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、海に近く、夏は海水浴に最適のところです。

また、海の家のある理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、500種以上の海の生物を集めた水族館があり、有料で公開されています。

### 記

1. 名 称 京都大学白浜海の家

2. 所 在 地 和歌山県西牟婁郡白浜町  
京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内

（交通機関）

J R紀勢本線「白浜駅」下車、明光バス「明光バス本社前」行に乘車、終点で「臨海」行バスに乘換えて、「臨海」下車。

3. 開設期間 通年開設

4. 室 数 和室3室

5. 収容人員 35名

6. 所要経費 1人1泊使用料50円、ほかに食費等実費程度。

7. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内総合体育館内、電話 学内2574）に照会して下さい。

（学生部）



## ＜資料＞

## 創 立 90 年 略 年 表

〔 〕 は一般的事項)

年 月	事 項	年 月	事 項
1897(明30)6	京都帝国大学創設。木下廣次、初代総長に就任	1944(昭19)5	木材研究所設置
9	理工科大学設置。第1回学生宣誓式举行	1945(昭20)8	〔太平洋戦争終わる〕
1899(明32)9	法科大学・医科大学設置	9	原爆災害総合研究調査団、広島県で遭難
12	附属図書館設置。医科大学附属医院設置	11	工学部教授鳥養利三郎、総長に就任
1903(明36)4	医科大学を京都医科大学と改称	1946(昭21)9	食糧科学研究所設置
1904(明37)2	〔日露戦争起こる〕	11	〔日本国憲法の公布〕
1906(明39)9	文科大学設置	1947(昭22)10	京都帝国大学を京都大学と改称。創立50周年記念祝賀式典
1907(明40)10	岡田良平、総長に就任	1949(昭24)5	新制京都大学設置。教育学部設置。分校設置。第三高等学校・附属医学専門部を包括
1908(明41)9	菊池大麓、総長に就任	6	〔朝鮮戦争起こる〕
1911(明44)3	京都医科大学を医科大学と改称	11	理学部教授湯川秀樹、ノーベル物理学賞受賞
1912(明45)5	理工科大学長久原躬弦、総長に就任	1950(昭25)3	第三高等学校廃止
1913(大2)5	澤柳政太郎、総長に就任	5	宇治分校の開校
7	澤柳総長、7教授に辞表の提出を求める(澤柳事件)	1951(昭26)4	防災研究所設置
1914(大3)7	理工科大学は工科大学と理科大学に分離〔第1次世界大戦起こる〕	11	医学部教授服部峻治郎、学長に就任。天皇本学ご訪問
8	東京帝国大学総長山川健次郎、本学総長を兼任	1952(昭27)3	附属医学専門部廃止
1915(大4)6	医科大学長荒木寅三郎、総長に就任	1953(昭28)4	新制大学院設置(8研究科設置)
1919(大8)2	分科大学を学部と改称	8	基礎物理学研究所設置
5	経済学部設置	12	法学部教授滝川幸辰、学長に就任
1920(大9)1	〔国際連盟発足〕	1954(昭29)4	分校を教養部と改称(学内措置)
1922(大11)6	創立25周年記念式典	1955(昭30)4	新制大学院医学研究科設置
1923(大12)9	〔関東大震災〕	1956(昭31)4	ウイルス研究所設置
11	農学部設置	1957(昭32)12	医学部教授平澤興、総長に就任
1924(大13)5	農学部附属農場、同演習林設置	1960(昭35)4	薬学部設置
1925(大14)2	本部本館竣工	1961(昭36)5	宇治分校廃止。工業教員養成所設置
1926(大15)10	化学研究所設置	1962(昭37)4	経済研究所設置
1928(昭3)4	河上肇教授辞職	1963(昭38)4	教養部設置。数理解析研究所設置。原子炉実験所設置
1929(昭4)3	理学部教授新城新蔵、総長に就任	12	農学部教授奥田東、総長に就任
1931(昭6)9	〔満州事変起こる〕	1965(昭40)4	東南アジア研究センター設置
1933(昭8)3	文学部教授小西重直、総長に就任	1966(昭41)4	保健管理センター設置
5	滝川幸辰教授休職を命ぜられる(滝川事件)	1967(昭42)6	霊長類研究所設置。結核研究所を結核胸部疾患研究所と改称
7	理学部教授松井元興、総長に就任	11	創立70周年記念式典、「京都大学七十年史」出版
1937(昭12)6	文学部教授濱田耕作、総長に就任	1968(昭43)2	〔学園紛争起こる〕
7	〔日華事変起こる〕	1969(昭44)4	大型計算機センター設置
1938(昭13)11	文学部教授羽田亨、総長に就任	12	工学部教授前田敏男、総長に就任
1939(昭14)5	臨時附属医学専門部設置	1970(昭45)3	工業教員養成所廃止
8	人文科学研究所設置	1971(昭46)4	工学研究所を原子エネルギー研究所と改称。放射性同位元素総合センター設置
9	〔第2次世界大戦起こる〕	1972(昭47)5	体育指導センター設置
1940(昭15)1	学旗および学歌制定	1973(昭48)12	医学部教授岡本道雄、総長に就任
1941(昭16)3	結核研究所設置	1975(昭50)4	医療技術短期大学部設置
11	工学研究所設置	1976(昭51)5	ヘリオトロン核融合研究センター設置。
12	〔太平洋戦争起こる〕		
1943(昭18)11	出陣学徒壮行式		
12	「京都帝国大学史」出版		



年 月	事 項	年 月	事 項
1977(昭52) 4	放射線生物研究センター設置	5	メキシコ、グアダハラ大学と学術交流 覚書交換
7	環境保全センター設置	6	医用高分子研究センター研究棟竣工、結 核胸部疾患研究所研究棟竣工
8	埋蔵文化財研究センター設置、国際交流 委員会設置	10	附属図書館竣工
1978(昭53) 3	医療技術短期大学部校舎竣工	1984(昭59) 2	タイ国、カセサート大学と学術交流覚書 交換
4	医学部附属病院 R I 診療棟竣工	3	工学部物理工学科校舎竣工、ヘリオトロ ン核融合研究センターヘリオトロン加熱 実験棟竣工、農学部附属水産実験所水産 生物標本館竣工
10	情報処理教育センター設置	8	農学部畜産学教室動物実験棟竣工
1979(昭54) 1	京大会館竣工	9	将来計画検討委員会設置、学術情報シス テム整備委員会設置
3	〔共通第一次学力試験実施〕、理学部附属 飛騨天文台ドームレス太陽望遠鏡棟竣工	10	西ドイツ、ベルリン自由大学と学術交流 覚書交換、放射線生物研究センター研究 棟竣工
4	医学部(2号館)校舎竣工、東南アジア 研究センター研究棟竣工、発明取扱規程 起案委員会「教官等の発明に係る特許等 の取扱いに関する規程案について」答申	1985(昭60) 3	将来計画検討委員会第一次答申
4	大学院工学研究科物理工学専攻設置	4	大学院医学研究科分子医学系専攻設置
6	原子炉実験所体育館竣工	10	将来計画検討委員会第二次答申、アメリ カ、ウエイン州立大学と学術交流覚書交 換
7	発明審議委員会設置	11	大学院審議会制規等専門委員会「学術博 士及び学術修士の基準と審査手続に關す る答申」
8	ヘリオトロン E 高温プラズマ実験棟竣工	12	工学部教授西島安則、総長に就任
9	組替え DNA 実験安全委員会設置	1986(昭61) 2	理学部トーラス型プラズマ波動加熱実験 棟竣工
10	京都大学市民講座開始	3	医学部解剖学教室及び生理学教室竣工
11	フランス、パリ第7大学と学術交流協定 締結	4	アフリカ地域研究センター設置、大学院 理学研究科霊長類学専攻設置
12	農学部教授沢田敏男、総長に就任、敷地 利用特別委員会設置	5	工学部分子工学専攻実験研究棟竣工
1980(昭55) 2	理学部宇宙物理学科(等)校舎竣工、韓 国、慶北大学と学術交流協定締結	6	文学部博物館竣工、大学院審議会制規等 専門委員会「京都大学名誉博士の制度に 關する答申」
4	医用高分子研究センター設置	9	広報委員会「本学を紹介する和文冊子の 編集等について」答申
5	中国、西北大学と学術交流覚書交換	10	宇治地区外国人研究者宿泊施設竣工
10	中国、武漢大学と学術交流覚書交換	1987(昭62) 1	将来計画検討委員会第三次答申、大学院 審議会制規等専門委員会「大学院の整備 ・充実について」答申
1981(昭56) 4	超高層電波研究センター設置、大学院農 学研究科熱帯農学専攻設置	2	広報委員会「京都大学写真集に關する答 申」、国際交流委員会「京都大学国際交 流センター設置について」答申
11	医学部附属総合解剖センター竣工	3	〔国立大学の受験機会複数化実施〕、教養 部校舎竣工
12	工学部教授福井謙一、ノーベル化学賞受 賞、オーストラリア、クイーンズランド 大学と学術交流覚書交換	4	大学院経済学研究科現代経済学専攻設 置、大学院工学研究科応用システム科学 専攻設置、教養部にかかわる構想検討委 員会設置
1982(昭57) 3	国際交流会館竣工	6	創立90周年記念式典
5	大学院審議会制規等専門委員会「博士の 学位の性格及び水準並びに審査手続に關 する答申」		
6	北白川スポーツ会館竣工		
10	日本語・日本文化研修留学生受入開始		
1983(昭58) 1	大学院審議会制規等専門委員会「外国人 学生等の博士の学位取得に關する答申」		
3	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟竣工、 超高層電波研究センター MU レーダー観 測所観測棟竣工		
4	大学院工学研究科分子工学専攻設置、中 国、北京大学と学術交流覚書交換		

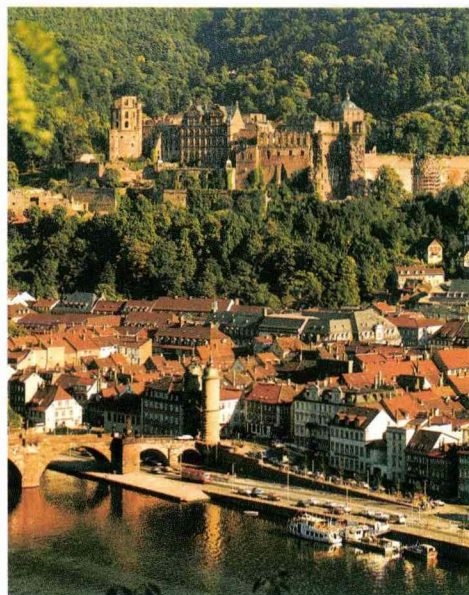
昭和52年4月までの事項は、広報 No.142 で掲載したものを、省略して再掲。

## ＜随 想＞

ハイデルベルク大学  
を訪れて

名誉教授 早 石 修

ハイデルベルク大学はドイツ最古の大学のひとつであり、1386年にルプレヒト一世によって創設され、今年で創立600年の歴史を祝った。1803年カール太公によってバーデン州立大学となって以来、正式にはルプレヒト・カール大学と呼ばれている。ヤスパースをはじめ多くの偉大な哲学者や数多くのノーベル賞受賞者が輩出しているが、医学関係ではコッセル（1910年）、マイヤーホーフ（1922年）が受賞している他、化学の受賞者リヒルト・クーン（1938年）は日本にも知己が多い。本大学の600年記念行事として一昨年10月から昨年12月にかけて「伝統から未来へ」というスローガンを掲げて数々の創立記念事業が行われ、100以上の国際会議やシンポジウム、音楽会、展覧会、演劇上演などが開催され、記



ネッカー河畔の町ハイデルベルク

念貨幣、メダル、記念記手などが発行された。

本学からも西島学長が祝典に参加されたと仄聞しているが、筆者は昭和61年9月27日から10月4日にわたってハイデルベルク科学アカデミーで開催された「動脈壁の分子生物学」と題する国際シンポジウムに招かれ「脳とプロスタグランジン」について最近のわれわれの成果を発表した。会議は28日「リボプロテインとそのレセプター」をテーマとするセッションにはじまり、夜は大学学長の招宴で古い学生ホール Haus Buhl で晩餐会があり、ロックフェラー大学の花房秀三郎教授夫妻と同席したが、60人を超える招待講演者の中で日本人はわれわれだけであった。7日間を通じて1日平均100人前後の少人数で充分討論できるように会場が設定されていたが、生化学、分子生物学、免疫学等の手法や考え方をとり入れて細胞生物学者や臨床家が次々に新しい知見を発表し、学際的な研究が多いことに深い感動を覚えると同時に、日本の学界の現状にやゝ不安を抱いた次第であった。

ハイデルベルクはネッカー河に沿う古い美しい町で、多くの芸術家や詩人に愛され、就中ハインリッヒとケティの悲恋を描いたフェルステルの名作「アルトハイデルベルク」によって世界的に知られている。人口は僅かに13万をこえる程度であるが、そのうち学生数は2万数千を数え、大学の外に医学、細胞生物学など5つのマックス・プランク研究所、ヨーロッパ分子生物学研究所（EMBL）、ドイツ癌研究所をはじめ多くの立派な研究施設があり、大学と連繫し乍ら立派な成果をあげている。学会の会場のアカデミーは有名なハイデルベルクの古城のすぐ下にあり、散会後は城にのぼってネッカーの溪谷を眺めたり、対岸にある哲学の道——京都にある哲学の道の元祖であろうか——を散策しながら討論が続けられたが、随所に600年の歴史と伝統を偲ばせる建物が美しい自然の中に維持されており、このような素晴らしい環境に学べる学生を羨しく感じた次第であった。

（はやいし おさむ 元医学部長 昭和58年退官 現大阪医科大学長 専門は生化学）